

鳩木節子の後日
甘木数彦

第五章

四

節子はコンビニの前に立っていた。買ったばかりのカップアイスを一息食べる。冷たさ、甘さ、柔らかな小豆の抵抗感。すべてが灼熱の立ち上る眼前のアスファルトと見事な対比を生み出していた。

無心でアイスを食べていると、忠晴が通りかかった。忠晴も節子に気づき、足を止める。

「買い食いかい？」

「ええ。忠晴さんはお出掛けですか？」

節子は努めてにこやかに言った。

汽一郎の不死身化と関係しているかもしれないと知ってから、どうも忠晴に対して気持ちの上で構えてしまうところがあったのだ。

そうとも知らず忠晴は、首から提げたタオルで顔を拭うとうなずいた。

「急ぎの用じゃ、ないんだけどね。そんなことより、暑いからって冷たいものを食べるのは感心しないなあ」

なぜそんなことを言われるのか解らず、節子は首をかしげた。

「とにかく色々あって、体を冷やすのは健康によくない」

節子は余計に戸惑った。常人を超える頑健さを備える、自分の結構を気遣うことなど意味がないからだ。忠晴もすぐそのことに思い至り、苦笑した。

「そうか。節子ちゃんはそのこと気にする必要なんてないんだったな。いや、歳を取ると健康でいるのもそれなりに大変だね。まるで健康に気を遣わないことが礼儀にでも反するように見えていけない」

「そんな。忠晴さんはお元気そうじゃないですか」

「なに。日頃の摂生のたまものだよ。そりゃもう、涙ぐましいくらい」

アイスをもう一口食べると、節子は少し探りを入れてみることにした。

「汽一郎さんも人並み以上に丈夫ですよ。夜あんなに働いてるのに、管理人の仕事もしてるんですから。意外と汽一郎さんも健康法とかに詳しいのかも知れないですね。血がづながらなくてもやっぱり親子だと、似てくるとか」

「親子？ それは誰から？」

「伊助さんが」

忠晴は溜息をつく、タオルで首筋をこすった。

「時間はあるかな？ よかったら、駅まで来ないか」

節子はうなずくとアイスの残りを急いで食べた。二人は並んで歩き出す。

「隠すつもりはなかったんだけど、親子と言うには中途半端な関係だね。それに、普段から顔を合わせるとお互いにあのとおりだ。言い出しづらくてな。あいつは、節子ちゃんが知ってることは？」

「知ってます」

「なにか言ってる」

「いえ、特には。ただ、そうなんだよ、って」

「そうか」忠晴はそこで少し言葉を切り、再び話しはじめた。「いつの世もそうだし、私も人のことを言えた義理じゃないんだが、親の心を子供は知らないものでね。良かれと思っただけのことを、疎ましく感じたりする」

それは、不死身にしたことですか？ 節子はよっぽどそう尋ねようかと思ったがやめた。まずは喋るだけ喋らせた方がいい。

「私はあいつに、できる限りのことをしてやった。なのにどうだ。誰であれ感謝するのが当然の恩を受けたのに、あいつはそれを仇で返した。親子だから、では説明がつかないくらいに。まったく理解できない」感情が高ぶっているのだろう。わずかに声が震えていた。

「感情的になるのはいかな」口調をやわらげ、忠晴は言った。

正直に答えてもらえないだろうと思いつつ、節子はいったい汽一郎がどんなことをしたのか尋ねてみた。

「そうだな……」

忠晴は手近な路地へと入っていった。そして十分に表通りから遠ざかると、そこで立ち止まった。両側に迫った建物の落とす影は、まるで忠晴自身の暗い側面が滲み出たようだった。

「あいつは、コキドーハイツに放火したんだ」

予想外の言葉に、節子は思わず聞き返してしまった。汽一郎がそんなことをするとは、どうしても信じられない。

「驚くのも無理はないが、本当のことだ。あの建物にはもともと地下蔵があったんだが、そこに石油をまいて火を放った。火は地上へ回る前に消し止められたが、もう少しで私も焼け死ぬところだった。それに、地下は完全にダメになってしまっただけで、あそこには先祖伝来の掛け軸やら店頭に出してない商品やら大切なものが色々あったのに、埋め立てるしかなかった」

「それ、犯罪ですよ」

自分でも間抜けな感想だと思ったが、他に言葉が浮かばない。

「警察に連絡できるわけがないだろう。血縁上も戸籍上も無関係だとはいえ、私が養父であることはみんなが知っている。悪い噂を立てば、仕事まで失いかねない。それに、いや、それに」

言いさして忠春は口をつぐんだ。節子は核心へ一気に踏み込む。

「知ってますよ。汽一郎さんが不死身なのも、伊助さんや忠春さんのことを手伝っていたのも。だから、調べられなくなかったんですね？ 調べられたら第三の協力者が誰なのかも、その人がまだ死んでいないことも、バレるかもしれないから」

忠春はうなずいた。頭の動きにあわせて、顔の表面を深い影が上下にすべる。

「誰から聞いたのかは問わないでおこう。それは些末なことだ。重要なのはどこまで知っているのか、だ。とはいえ」忠春は腕時計を見た。「そろそろ行かないと。続きはまた」そう言って忠春は節子の横を抜け、歩き去ろうとした。

「待って。ひとつだけ、教えてください」

忠春は足を止めた。

「ああ。どうぞ」

「どうして、そんな話を？」

忠春は背筋を伸ばし、正面から節子を見据えた。そして軽く左手を曲げ、胸にあてがう。「なぜって。そりゃあ汽一郎から、奴に都合のいい話だけを吹き込まれて、本気にしたら困るからだよ。信じられないだろうけれどあいつはまだ、私のことを狙っているんだ」そこで左手をおろす。「こんな話に付き合わせてしまって、悪かったね」

忠春は会釈をし、今度こそ止められることもなく立ち去った。

残された節子は任務中にも感じないような疲労を覚え、壁に寄りかかった。まだ、そこに忠春の気配が残っているようだった。節子は目を閉じ、それを遮断する。

忠春が語った内容を思い返す。やはり、そのまま信じて受け容れることはできなかった。もしすべてが事実なら、あれほど長い期間、同じ建物で暮らすことなど無理ではないだろうか。

それに喋っていたときの忠春は、怨みや憎悪を押し隠しているふうでもなかった。むしろ節子などに想像もできない、もっと遠い所から来る何かに感情を委ねていたような気がした。その「何か」がなんであれ、単純に「殺されかけた」という以上の事情がそこに存在することを窺わせた。

疲労に誘発されたのか、無気力さが足元から這い寄ってくる。節子は目を開け、表通りへと出た。視神経を引き絞るような強い光が、辺りを豊かな陰影で彩っていた。空気は澁むことなく流れ、寒かったわけでもないのに節子は身震いをした。

部屋へ帰ると、節子は窓を開け布団を敷いて横になった。体が重い。体だけではない。コキドーハイツへ越してきてから、何もかもが節子を圧してくるようだった。

新しく知り合った人々は、誰もが好ましく思えた。そうした人達と関係が深まることは少しも苦ではなく、むしろ快いほどだった。

それなのにその人達同士を結びつけているものが節子を絡め取り、重圧の中へ引き入れてくるのだ。折り重なった関係の網は、これまで薄い人付き合いしかしてこなかった節子にとって、手に負えないほどの複雑さを持っていた。

ぼんやりと天井を見上げる目の端に、涙がにじんだ。どうしようもない無気力感と、無気力感へ総てを任せられない苛立たしさ。そして、そんな自分を情けなく思う気持ち。いったい何をどうすればいいのか少しも解らない。

いつの間にか節子は眠っていた。ドアを叩く音で目が覚めた。部屋の中は暗い。ドアを開けると、香奈が立っていた。まだ寝ぼけているのかその姿が一瞬、影に包まれて立つ忠春と重なって見えた。

「どうしたの？ 夏風邪でもひいた？」

事情を知らない香奈は、気遣わしげに言った。その率直な態度が、今の節子にはことのほか嬉しかった。

「すみません。昼寝をしていたらこんな時間に。あの、すぐに何か作りますから」一眠りしたからか、気持ちはずいぶん落ち着いていた。

ビールと昨夜の残りの枝豆を香奈に出すと、節子は夕飯の支度に取りかかった。冷凍庫にご飯があったので、とりあえずそれを解凍しつつタマネギの皮をむく。チャーハンと簡単な中華スープを作るつもりだった。

香奈は相変わらず物思いに沈んでいるらしく、あまり喋らない。電子レンジのファンが回る音だけが、低くなり高くなりしつづ部屋の中に響く。

「コキドーハイツに昔、地下室があったって本当ですか？ 火事で焼けちゃって埋め立てたって聞いたんですけど」

タマネギを刻みながら節子は尋ねた。確かめずにいられなかったのだ。

「え？ なんて？」

口元にあてがっていたグラスをテーブルへ置くと、香奈は聞き返した。節子は同じ言葉を繰り返す。

「ああ。地下室ね。あったよ。それがどうしたの？」

「いえ、もう少し聞かせてください」

香奈は少し怪訝そうだった。

「えっと、そのころはまだマンションにもっと人が住んで、地下室はお店の倉庫とかだったはず。それが燃えちゃってさ。倒壊しないように埋め立てただけで、やっぱり不安になってほとんどの人が引っ越していったんだよね。商品は燃えるし家賃は激減だしで大変だったんじゃないかな。それで今は空き部屋を倉庫として使ってるわけ」

「それって、原因は」

「空調の故障だって。骨董品は温度とか湿度の管理が重要でしょう？ それで空調設備を入れてただって。一番下にボイラー室もあったらしいし。その電気系統が」

「一番下？」

「マンションの地下って五階くらいまであったらしいんだよね。誰も確かめた人はいないけど」

そう言うと香奈は手を伸ばし、一晩たってややしなびた枝豆を取った。

「地下室っていうからもっと小さい部屋があるだけかと」

電子レンジが鳴った。節子はドアを開けてラップにくるまれたご飯の表面に触れ、具合を確かめる。触れたところから熱が伝わってきた。

「ま、噂だけど」

「でも、それなりに根拠があるんですよね？」

「根拠というか、防空壕がどうこうっていう……。そういえば、その辺はあんまりちゃんと聞いたことない。だいぶん昔からある話なんじゃないかな。で、さっきもきいたけど、地下室がどうかした？」

「いえ、別に。ただ地下室があったって忠春さんから聞いただけです。ひょっとしたら無事だった骨董品が気付かれずに埋まってるかも、みたいな話だったんですけど」

「なるほど。たしか現場検証して、すぐに埋めちゃってたからね。熱で鉄骨やら壁やら、かなり傷んでたろうし。そう考えると住んでた人たちがすぐ引っ越したのだから、避難勧告があったのかも。あーっ、でも貴重な能面なんか焼けたかもしれないのか。もったいない」

いつもと同じ調子で喋っている香奈だったが、やはりなにか違うことに気を取られているらしく、話はそれ以上ふくらむことなく終わった。節子も料理の続きに取りかかる。いつの間にか、外では雨が降りだしていた。ときどき雷の音も聞こえる。

手を動かしながら、節子はまた噂というものについて考えていた。ある種の噂は時間の

経過とともに経緯や背景が省略されていく。やがて端的な結果のみが残り、後から知った者にはまるで固定的な事実であるかのように映る。

コキドーハイツの地下が五階までであったという話も、結局はそういうことなのだろう。香奈でさえ地下が五階までであったこと、それが噂にすぎないことは知っていても、その理由はよく知らない。

香奈より下の世代であれば「コキドーハイツはかつて地下五階までであった」ということしか知らない可能性もある。そして経緯や背景を知る者がいなくなったとき、噂は事実として扱われるようになるだろう。

地下室の火事は電気系統のトラブルが原因だ、という話だって元は噂話だったのかも知れない。それどころか原因についての噂は他にもあり、時間の経過とともにそのうちの一つだけが今に残っているという可能性だってある。

そうしてみると、ゆびぬき通りやそこに住む人々について節子が知っていると思っていることにも、元は噂話だった内容が含まれているのかもしれない。だが、節子にはそれを判別することができない。

節子はフライパンに油を入れると、コンロの火をつけようとした。ひときわ大きな雷鳴が轟き、明かりが消える。節子はブレーカーの様子を見に行ったが、特に落ちてはいなかった。

「停電みたいです」

香奈に声を掛ける。

「大丈夫。このマンションは非常用の自家発電システムがあつてさ。停電すると自動的にそっちへ切り替わるんだって。珍しいよね」

節子の居場所が把握できないからだろう。香奈は普段よりやや大きな声を出している。

「やっぱりお店があるからですか？」

「うーん。たぶん」

しかし、待ってみてもなかなか電気は復旧しなかった。

「非常用の発電システムって、動き出すまでけっこう時間がかかるんですね」

「前に停電だったときはもっと早く復旧したんだけど」

空気がだんだんと暖まり、澱んでくる。息苦しさを感じ、節子は部屋の窓を開け放った。外から濃厚な雨のにおいが流れ込んでくる。

香奈の携帯電話が鳴った。電話に出た香奈は少し話すと、すぐに節子呼んだ。

「忠春さんが替わってって」

携帯電話のディスプレイから発せられる光が、香奈の横顔を浮かび上がらせている。灰色から黒へ。柔らかな影のグラデーションが香奈の顔を彩っていた。つかの間、節子は香奈に見惚れると電話を受け取った。

「もしもし、替わりました」

「節子ちゃんか？ すまないけれど昭平さんの部屋の前まで来てくれないか。今すぐ。事情は、ああ...、後で話す」

節子はすぐに応じると電話を切った。唐突な呼び出しには慣れている。こんなときはとりあえず出向くのが一番効率的なのだ。

「忠春さんから、昭平さんの部屋の前にすぐ来てほしいって言われました。香奈さんはこ

ここにいるか、部屋に帰るかしてください。鍵は開けてても大丈夫ですから。すみません」
節子は香奈に携帯電話を返しながら早口に告げると、部屋を出た。

昭平の部屋の前まで行くと、ドアの所に大きな懐中電灯を持った忠春が立っていた。カーディガンを羽織っている。昭平の部屋が寒いせいだろう。

「助かった。悪いが隣の部屋に大きな四角い缶と丸い缶があるから、それを持って昭平くんの部屋の風呂まで来てくれないか。鍵は開いてるから」

節子は何も尋ねず、忠春の言葉に従った。

部屋の中には資材や段ボールなどがいくつも積まれていた。暗闇の中でも、節子の目は素早く頼まれたものを見つけ出した。一斗缶というのだろうか。節子にとってはそうでもないが、かなり重たい。両手に一つずつ持ち、昭平の部屋へ向かう。

室内は相変わらず涼しかった。ただ、いつもほどではない。ここでも、空気はどこか濁って感じられた。

風呂場のガラス戸は締め切られていた。その向こうで懐中電灯の光がせわしく揺れ動いている。節子は戸を開けた。途端に今までよりも強く、薬剤の臭いが節子の鼻を衝いた。

「これをしなさい」

声がしたかと思うと、忠春から何かを押しつけられた。マスクとゴーグルだった。装着するとやや息苦しかったが、臭いはだいぶ軽減された。

洗い場の奥に、大きな古い送風機のようなものが設置されていた。そのせいで狭い浴室はろくに使えないほど狭くなっていた。そして浴槽には昭平が座っており、服を着たまま液体に浸かっている。

意識がないのか昭平は目を閉じ、力無く浴槽の壁に体を預けている。

「この長靴を履いて、中に入れてくれ」

忠春はそう言うのと履いていた長靴を脱ぎ、節子と場所を入れ替わった。そして缶を受け取ると床に置いてあった工具でその蓋を開け、節子へ返した。

「両方の中身を浴槽へ開けてくれ。それが済んだらまた隣から同じものを持ってくる。浴槽からあふれてもいいから、とにかくどんどん缶の中身を浴槽へ入れるんだ」

節子は言われたとおり二種類の液体を浴槽へ注ぐと、再び隣の部屋から同じものを持ってきた。そうして忠春に蓋を開けてもらい、また中身を浴槽へ足す。

どういう化学反応なのか、缶の中身を浴槽へ空けるたび周囲の温度は急速に下がっていった。送風機のような機械も、浴室の壁や天井も霜で覆われていく。息に含まれる水分がマスクのふちで結露となり、節子は痒みを覚えた。

そんな薬剤に浸かっている昭平が無事でいられるとは思えなかったのだが、まさか殺すようなことはしないだろう。とはいえ、ぐったりしたまま一向に動かない昭平は、もう死んでいるようにも見えた。

何度か往復かしたところで、明かりが灯った。缶を持って廊下へ出たところだった。蛍光灯が一斉にまたたいて、ぼんやりとした鈍い光を周囲へ投げかける。

昭平の部屋へ入ると、浴室から低い稼働音が聞こえた。忠春が機械の前に立って何かをしているのが見えた。

「あの、これ」

節子は両手の缶を掲げてみせる。

「ああ、とりあえずその辺に置いておいてくれ。ありがとう」

節子は廊下のすみに並べられた空き缶の列から少し離れたところへ、持ってきた缶を置いた。忠春が浴室から出てくる。

「本当に助かった。これでとりあえずは大丈夫だろう」

マスク越しのくぐもった声で、忠春は言った。いつの間にか、両手には革の手袋がはめられていた。

「それはいいんですけど、そろそろ説明してもらえませんか？」

「ああ……、そうだな」忠春は浴室を見やる。「ここは薬品の臭いがひどい。私の部屋へ行こう」

忠春の部屋は職業柄、家具調度がどれも骨董品だった。決して広くはないが、居心地よく整えられている。

忠春が窓を開けると、うまい具合に往来の風が部屋の中を通り抜けていく。寒すぎる昭平の部屋と蒸し暑い廊下とを行き来していた節子には、ほどよく乾いた空気が心地よかった。

忠春は節子から手袋やゴーグルなどを受け取ると、どこかへそれを片付けに行った。少しして、お盆へグラス二つを乗せて戻ってきた。グラスの中には麦茶が満たされている。

「夏だからって冷たいものは体に悪いからな」

言葉のとおり、忠春から渡されたグラスはぬるかった。

二人は向かい合って座ると、ゆっくり麦茶を飲んだ。焦げ臭くなる寸前の、深い香ばしさが体に浸透する。まとわりついていた薬品の異臭が、風に吹かれて少しずつ薄れていった。

忠春は目を細めて軽く両眉を持ち上げ、口元を僅かにこわばらせていた。ふてくされているようにも、虚脱しているようにも見える。

「あれは、なんだったんですか？」

一向に喋ろうとしない忠春へ、節子は尋ねた。忠春は大きく息を鼻から吐いて、口を開いた。

「昭平くんは、世界的にもまれな病気にかかっている。体が徐々に腐敗していくんだ。ムニョスという医者がアメリカで研究していたらしいんだが、今のところ治療法はない。だから、部屋を冷やして腐敗の進行を抑えている。もっとも、対策はそれだけじゃないが」

「じゃあ、パソコンを冷やすためって言われたのは」

「さあ。パソコンも冷やした方がいいのかもしれないな」忠春は机の表面を手のひらで撫でながら、ゆっくりと語った。「この建物は自家発電を備えていてね。停電の時はそちらへ切り替わるはずなんだが、どうも故障していたようだ。そこで、室温が上がる前に昭平くんを冷やす必要があった。そこで、乱暴ではあるが冷却装置に使う薬剤へじかに浸からせたというわけだ」

節子は昭平が以前、ここより他では生きていけないと言っていたことを思い出した。

もし忠春の話が事実なら、確かに昭平にとってここより生きやすい場所はないだろう。それは汽一郎や伊助、そして節子自身も同じだという単純なことに気付く。ならば、自分がわざわざ掻き乱さないほうがいい。

話は終わったということなのか、忠春は何も言わず麦茶の残りを飲んでいく。しかし、

節子の方ではまだ問いただすことがあった。

いま気付いたばかりのことが決心を鈍らせる。ただ、放っておくにはあまりにも気がかりな内容だった。決断はすぐに下された。

「昭平さん、脈が止まってましたよ。呼吸もしてなかったし」

忠春は意外そうな表情を作ろうとして数瞬の迷いに捕らわれ、けっきょく深いため息を吐いた。

「忠春さんが目を離したときに確かめてみたんです。その、死体にしか見えなかったから」忠春は無言だった。

「嘘をつかれても、隠し事をされても、私はいいいんです。仕方ないこともあると思ってますから。でもはっきり解ってしまうと、さすがに少し、辛い、です」

喋りながら節子は、自分でも意外なほど気持ちが高ぶるのを感じて動揺した。声が震えないようにするのが精一杯だった。

長い沈黙を経て、忠春が口を開いた。

「心配しなくても、昭平くんは死んでない。温度にさえ気をつければ、彼は死なない。いや、違うな。どう説明したものか」忠春は空になったグラスを見つめて、考え込んだ。

「これから話すことが、信じてもらえるかどうかは解らない。ただ、節子ちゃんなら信じてくれるかもしれないな。さっきの話も、まったく嘘というわけじゃないんだ。昭平くんはある意味、病を患っているようなものだ。ムニョスという医学者がその病について研究していたというのも本当だ。志半ばにして、その病に倒れたというのが……。実は私も、同じテーマを研究していたことがある」

「不老不死の研究、ですね？」

「知ってたのか」

忠春は意外そうに言った。節子は自分がそう考えるに至った経緯を説明した。

「そうだったのか。知られているは思ってもみなかったが、まあ今となってはかえって話が早い」

忠春の話によると、昭平はもともと大正の生まれで、優秀な医者だったのだという。開業医として実家の病院で働く傍ら、彼はある研究を行っていた。

それは、不老不死を実現するというものだった。といっても、いたって善良な医師であった昭平は、怪我や病に苦しむ人々を救いたいという素朴な動機から不老不死に関心を持ったのだそう。

何年もの研究の末、昭平はある可能性を発見した。幾度かの動物実験で自信を深めた昭平は自分を素材にして、最後に人体実験を行った。患者を実験台にすることは最初から考えていなかったという。

実験は、昭平の望んでいた結果をもたらさなかった。

「彼は確かに老いもしなければ、病気や怪我、飢えや渴きで死ぬこともない。当たり前なことだ。昭平くんの肉体はとうに活動を停止しているのだからな。いわば、死んだ肉体で意識活動だけが続けているという状態だ。それを生きていと呼べれば、だが。だから、それこそ生ものと同様、冷蔵しておかなければ彼の体は腐敗してしまうのだ。さらに、それだけではたいして保たないから、定期的にある種の防腐剤を接種する必要もある」

昭平は自分の見に何が起きたのかを悟ると、絶望しつつも生き延びるために、そして陥

った状況から脱却するために、研究を続けた。しかしなかなか成果は上がらなかった。電力の供給も今より不安定で、何度も死にかけたという。

「そして、どこでどう聞きつけたのか、私の所へやってきた。私が不老不死の研究をしていたことは知っているだろう？ 汽一郎の奴がそれらしいことを言っていたよ。いやいや、いいんだ。どのみちいつかは知られるだろうと思っていた。私は同じ目標を目指す同志として、彼の研究に興味を持った。そして、その知識と引き替えにここで彼を保護すると約束した。実際、彼の研究は大いに興味深かった。その理論には驚嘆させられたよ。彼自身は自分の研究が失敗したと思いきこんでいるが、私は違うと考えている。彼は彼なりに成功したんだよ」

「どういうことですか？」

「どうしても、彼の理論では死んだ肉体によって不老不死を達成する以外の結果になりそうな気がしないんだ。だから、彼の理論はすでに完成している。洗練することはできても、そこからいまの問題は解決できないだろう、ということだ。つまり、袋小路に入り込んでいるという意味だな」

それは、本当ならば絶望的な状況だった。

「そもそも彼や、同じような理論を追求していた人たちには、共通した誤解がある。不老不死とは元来、不老と不死とに分けて考えるべきだ。ところが昭平くんは、まるでそれらが一対であるかのように思いきこんでいたんだ。簡単な話だよ。不老とは、細胞が細胞を生み出す力を永遠に失わないということだ。一方で不死とは、怪我や病気といった致命的な事態を無効とすることだ。それぞれに必要な仕組みはまったく違う。それに、生きているとはどういうことか、死ぬとはどういうことか、そういった前提条件の立て方にも問題があった。今後、彼の理論の問題点が克服される可能性はある。険しい道だけれどね。今じゃ昭平くんはパソコンに熱中しているが、あれも進展しない研究から逃避しているという面がある。かつてにくらべれば、いまここはずっと死ぬ危険が低い。だからようやく他のことに熱中できるという事情もあるけれどね」

耳を傾けていた節子は、そこで口を開いた。

「じゃあ、昭平さんはあのまま？」

「そうとも言い切れない。たとえばそう、死んだ肉体を復活させるという手もある。どうやって実現するかは想像もつかないがね。これまでの経験から来るカンだが、不可能とはいえないだろうな。そのうえで私の研究を適用すれば、あるいは」

節子はその言葉に、少しだけ安心する。引き返す道が残されているだけでも、昭平は運がいい。たとえわずかな望みでも、ないよりはマシだ。

「まるっきり信じられない、ということはありません。私や伊助さん、それに汽一郎さんのこともありますし。急に全部を信じることは難しいですけど。それにしても、どうして急に？」

忠春の返答は早かった。

「そりゃあ、誤解されたくないからだよ。彼の呼吸や脈が止まっていることに気付かれた以上、嘘をつき続けようとするば厭な憶測をされそうだったからね。そもそも私はべつに悪人じゃない。最初に誤魔化そうとしたのも、余計な混乱や気遣いを避けたかっただけなんだ。悪かったね」

「いえ、私が同じ状況だったら、やっぱりなるべく知られないようにしたいと思います。だから気にしないでください。それより、今日は遅くまでありがとうございました」
時刻は〇時に近かった。

「一日くらい夜更かしをしてもいいだろう。とはいっても、さすがに眠たいな。それに疲れた」

忠春は大きく一つあくびをした。節子はあらためて礼を述べると、忠春の部屋を後にした。

部屋へ戻ると電気が灯っていた。滅多に使ったのこのないテレビの前で、節子がゲームをしていた。自分の部屋から勝手に持ってきてテレビにつないだらしい。傍らには空のグラスとアイスクリームの容器が置いてあった。

「遅かったじゃない。待ちくたびれた」

画面から目を離さず、香奈は言った。不機嫌そうだった。

「すみません」

節子はいきなり謝ってしまった。自分のせいではなかったが、香奈に言われるとなんだか自分が悪いような気がしてくる。

節子は冷凍庫からカップアイスのバニラを取り出すと香奈の隣に座り、画面を眺めた。気味の悪い日本家屋の中を、女の人が歩いている。ゲームをしない節子には何をしているのかよく解らなかったが、薄暗く広大な屋敷の映像はなかなか雰囲気があってよかった。

何をしていたのか、間違いなく香奈から尋ねられる。そうなったとき、いったいどう答えればいいのか。節子はそんなことを考えながらアイスのフタを開けようとした。

「待った」

香奈の声に、思わず手が止まる。

「どうしたんですか？」

「なんか、臭う」香奈はゲームの手を止めると、節子を見た。「先にお風呂に入ってきたよ」

節子は手の甲や袖を鼻に近付け、においを嗅ぐ。自分では何も感じない。

「そんなに、臭いますか？」

「まあ、それなりに」

曖昧な言い方をされると、ひょっとして酷く臭いのかもしれない、という不安に捕らわれる。

「じゃあ、すいませんがシャワーを浴びてきます」

節子は着替えを手に、浴室へ行った。脱衣所がないのでいったん中で服を脱ぎ、タオルでくるんで廊下へ出す。

熱い湯を頭から浴びながら、節子はどう説明したものか頭を悩ませた。勝手にすべてを話してしまうのはマズい気がする。ただでさえ汽一郎が不死身であることを知ってから、すこし様がおかしいのだ。ここで昭平や忠春のことまで話してしまったら、どんな影響があるか判らない。

忠春や昭平に口の軽い女だと思われるのも嫌だった。べつに口止めされたわけではないが、それはわざわざ念を押すまでもないと思われるからに違いない。香奈だって、自分のことを口が軽いと思うだろう。

シャワーを止め、ゆっくりと髪を洗う。なるべく時間を引き延ばしたかった。自然さを装ったシャンプーの香りが、節子の鋭敏な嗅覚を刺激する。

もしも本当のことを喋ったとしたらどうだろうか。香奈はそれを、本人たちに喋ったりしないような気がした。もしそうなら香奈は汽一郎にも、不死身であることを知っていると話してしまっただろう。そうなれば節子のもとへ、汽一郎からなにか言ってくるはずだ。

それなら正直に打ち明けてしまってもいいのではないか。そんな気持ちになる。けれども何かが、それをためらわせる。ただの予感でしかないが、これまでの経験からしてこうした予感はいが正しい。きっとそれは、実際には気付いていることを意識が見落としているという、無意識からの警告なのだろう。

考えれば考えるほど、どうすればいいのか迷ってしまう。精神的な疲労とあいまって、無気力さが節子にのしかかる。すべてがどうでもよく思えてくる。

どうして自分一人が、こんなふうに思い悩まなければならないのか。香奈がなにを知ったところで、それをどうするかは香奈自身が決めることだ。自分は関係ない。

そんな理屈が通らないことくらい解っていた。けれども、今の自分はそんなことより考えるべきことがあるのだ。

伊助のことが頭に浮かんだ。とたんに気掛かりの対象がクリアになり、意識が引き締まる。そもそも自分が呼ばれたのは伊助が部屋にいなかったせいだ。携帯電話にも出なかったのだろう。

普通の人なら買い物にでも行ったと考えるところだが、相手はあの伊助だ。そんなはずはない。いったいどこへ行ったのだろうか。自分が考えるべきはそれだ。

節子は大きく急いでシャンプーを流すと廊下に置いてあった着替えを身につけ、居間へ戻る。香奈はゲームをやめ、冷蔵庫から出した麦茶を飲んでいて。

「香奈さん」先手を打って声を掛ける。「伊助さんが部屋にいなかったみたいなんですけど」

香奈がその意味を理解するのに、すこし間があった。やがて香奈の目が大きく見開かれる。

「あの人がスーパーとかコンビニに行ってる可能性は低いですよ？」

香奈は頭を上下させる。

「これまで、黙って出かけることってありましたか？」

「節子ちゃんがここへ来る前なら、たぶん……。いやでも、さらわれたとか？」

「判りません。ただ、何かトラブルに巻き込まれている可能性はあります。停電にしても、非常用の発電システムが故障したことにしても、あるいは組織が」

「ちょっと落ち着いて。そもそもあんたはどのように呼ばれたわけ？」

「昭平さんが持病の発作を起こして、薬を飲ませたのはいいんですけど、どうしても医者には行かないって。ほらあの人、外を嫌がるじゃないですか。それで、落ち着くまで忠春さんと様子を見ていたんですけど。いざとなったら私が無理矢理にでもかついで病院へ連れて行くつもりだったんです」

それまで考えてもいなかった嘘が口から出てくる。さっきまでの葛藤は、伊助という存在によって消滅してしまった。

「じゃあ、電話が来た時点で伊助は。でも、忠春さんはそれを変だと思わなかったんですよ？」

「昭平さんのことに気を取られて、忘れてたんだと思います。私も今まで、意識から抜け落ちてたわけですし。とにかく伊助さんの部屋へ行ってみましょう」

伊助の部屋は明かりが消えていた。鍵はかかっておらず、ドアは簡単に開いた。二人は中へ入る。

室内の空気は日中の熱に何度も蒸し返されているようで、濁って感じられた。どうも伊助が留守にして、数日経っているらしい。見渡す限りでは書き置きも何もなく、いつも伊助が座っているソファの傍らには、夏布団が投げ出されていた。

「香奈さん……。どうしましょう」

節子は涙声だった。あまりのうろたえぶりに香奈は苦笑する。

「電話してみたら？ 番号おぼえてる？」

そう言って香奈は節子に携帯電話を手渡す。節子は伊助の番号を押した。呼び出し音が鳴り始めるまでの時間が長く長く感じられる。

呼び出し音は鳴ったが、伊助は出なかった。しばらくして、留守番電話の自動アナウンスが始まった。節子はメッセージを聞いたら掛け直すように告げ、電話を切った。香奈に携帯電話を返そうとして、自分の手がひどく汗ばんでいることに気付いた。顔に触れていたディスプレイも汗で濡れている。

「あ、すいません」

節子はシャツの袖で汗をぬぐう。

「動揺しすぎだって」

香奈は携帯電話を受け取りながら言う。

「そんな。こうしている今も、伊助さんがどんな危ない目に遭っているか判らないんですよ？ 本当に殺されることもありえます！ それを、そんな」

「そうか……。ごめん。ちょっと無神経だった」節子の激しい口調に気圧され、香奈は素直に謝った。「で、どうしようか」

節子は何か答えようとしたが、気ばかり焦ってうまく考えがまとまらなかった。嫌なイメージがとめどなく増幅する。

「いったん、部屋に戻ろっか」

二人で部屋を出ようとしたとき、香奈の携帯電話が鳴った。

「あ」

ディスプレイを目にした香奈は黙って携帯電話を差し出す。節子は慌ただしく電話を受け取った。

「もしもし」

「あれ？ 節子か。なんか姉さんから電話があったみたいなんだが」

伊助の声だ。普段よりも愛想がいい。

「それ、私です。留守電の声で気付いて欲しかったです。それであの、えっと今は、その」

「実家だ。さっきも忠春さんから電話があって。停電したんだって？」

平穏な伊助の声を聞くと、節子は安堵で力が抜けてきた。

「その件は大丈夫です。それより、本気で心配したんですよ」

伊助の実家といえば、愛媛県だったはずだ。

「いやあ、すまん。まさかこのタイミングで人が来るとは思ってなかった。ほら、普通な

ら一週間でも一〇日でも放っておかれるから」

「それはですけど。で、何をしてるんですか？」

本気で心配していた自分が馬鹿らしくなってくる。

「旦那寺が廃寺か無住寺かの瀬戸際で、他にも本家の長男ならではの問題がいろいろあって、本家って言うてもたいしたことないんだが、ともかく婿があかないから呼び戻されたんだ」

「むじゅ はい？」

節子が思わず聞き返すと、伊助は大げさに溜息をついた。

「最近の若者には通じないのか。つまりだな。先祖の墓のある寺に跡継ぎがいなくて、寺がなくなるか遠くの寺の住職が兼任するかに地元の利権やらが絡んでもめてるんだ」

「それと、本家の長男がどう関係するんですか？」

「俺はこう見えても悟山家本家の長男なんだよ。家を継がずに地元を離れたけどな。本家はわかるだろ？ けれども本家の土地家屋は俺がまだ名義人なんだ。それが、本家のある一帯を買収したいって話が出て、まあなんだ、中略するがとにかく金に関係してくるから親戚同士でこれもこじれててなあ」

伊助が実家へ戻っている理由はどうにか理解できたものの、あまりにも世界の違う話だったので、節子は何も言えなかった。

「いつごろ、戻ってきますか？」

ようやく出てきた言葉がそれだった。

「さあ。俺にも判らん。なんせこっちは人間関係がごちゃごちゃに絡まってから、一つのラインを引っ張ると他の部分が大量にくっついてくる。ぜんぜん進展しないんだ、これが。ま、そういうわけで忠春さんには謝っといてくれ。じゃあな」

それきり通話は切れてしまった。節子はしばらくのあいだ、携帯電話を耳に当てたまま立っていた。もっとなにか喋りたかったような気もするが、なんなのかは自分でもはっきりしなかった。思い付きさえすれば、電話をかけ直すことができる。きっと喜ばれないだろうが、あからさまに嫌がられることもないだろう。

「で、どうだって？」

伊助に電話を掛けなおす口実を考えていると、香奈が尋ねてきた。節子は手短かに事情を説明する。

節子の説明を聞いた香奈は深く納得するところがあったのか、大きくうなずいた。

「香奈さん、今の説明で解ったんですか？」

節子は聞いた話をさらに簡略化して喋っていたので、香奈があっさり理解したことに驚いた。

「まあね。別に難しい話じゃないでしょ。常識」

「そう、なんですか。なるべく世間的な常識は身につけるようにしてたんですが。知りませんでした」

「あ、いや常識ってわけでもないか」

「なんですか、それ」

香奈は軽く笑った。

「そんなことより、その感じだと帰ってくるのはまだ先になると思うよ。どうせ自分でど

うにかしようとはしないだろうし。行ったからには帰ってくるのも面倒だろうしね」
節子も同じことを考えていた。居続ける方が面倒だということにでもならないと、しばらくは戻ってこないだろう。

「じゃ、今日はこれで解散ね。ゲームは明日まで置いておいて」

「あの、お店は」

「開けるに決まってるじゃない。今日はもう遅いから、あんたも早く寝るんだよ」

いかにも保護者ぶった口調で言うと、香奈は玄関のドアを開けた。節子は流れ込んでくる濃厚な夜気を、胸に深々と吸い込んだ。なぜだか舌に、甘みを感じた

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>